

報 告

平成20年度 海外研修報告

— 第2回看護学部学生海外研修を実施して —

看護学部国際交流委員会

荒井 淑子¹⁾, 渡邊 竹美²⁾, 香月 毅史¹⁾

要旨

2008年9月8日～9月15日の6泊8日の日程で、米国Washington州Seattleにおいて、第2回看護学部学生海外研修を実施した。参加者は学生と教員を合わせて14名であった。視察施設は、高齢者施設2箇所、小児病院1箇所、がん患者や家族をサポートする非営利団体施設1箇所の合計4箇所であった。今回の海外研修に対する満足度は、参加学生12名のうち11名が「満足している」と回答していた。

キーワード：海外研修、国際交流

I. はじめに

第2回看護学部学生海外研修が、米国Washington州Seattleにおいて、2008年9月8日～9月15日の6泊8日の日程で実施された。この海外研修は、本学部の「国際的な視野を持って活動できる能力を養う」という教育目標を指針に、学部開設当初から国際交流委員会で検討を重ねられてきた研修である。昨年度実施された第1回めの研修で明らかになった交流を深めるための課題をもとに2回目海外研修が計画され実施となった。

今回の海外研修の実施にあたり、オリエンテーション時に意向調査を行った。意向調査の結果では、1～4年次生256名中「ぜひ参加したい」「可能ならば参加したい」が60名(23.4%)であったが、最終的な参加申込者は12名(3年生3名、2年生9名)であり、引率教員2名をあわせて計14名であった。

本稿では、看護学部学生研修プログラム(以下研修プログラムとする)の概要および学生を対象に行ったアンケート調査の結果を中心に報告する。

II. 研修プログラムの概要

本研修の目的は、①海外体験を通してアメリカの医療・看護に触れる、②国際的視野を広げる、③自己成長を促す、以上の3点とした。研修プログラムは、ワシントン大学キャンパス見学から始まり、シアトル市内の保健・医療・福祉施設の視察を行っ

た。施設研修中の宿泊は、ワシントン大学キャンパス内のドミトリーに滞在し、自由時間にもキャンパス内の散策の拠点としたり、ワシントン大学生や他の研修生との交流の場となるようにもした。4日目と5日目の宿泊は、シアトル市内のホテルに宿泊し、市内自主研修を実施した。[表1]

[表1] 学生海外研修プログラム

	研修内容
9月8日 (月)	シアトル到着後、専用バスで市内研修 ◇ワシントン大学キャンパス内のMcCarty Hallにて レジデントアドバイザーによるオリエンテーション
9月9日 (火)	◇ワシントン大学生による案内で、ワシントン 大学施設見学(図書館、パーク公園など) その後、各自キャンパス内を散策 16:00 マリナーズ対テキサスレンジャーズ観戦
9月10日 (水)	◇UW Medical Center, Health Science Center自主見学 ◇ワシントン大学の教員による講演 (講師: Yoriko Kozuki, Ph.D., A.R.N.P.) ◇ワシントン大学生とフェアウェルパーティー
9月11日 (木)	◇「Seattle Keiro Nursing Home」視察 レクチャーQ&A+施設見学+利用者との交流 ◇「Anderson House」視察 レクチャーQ&A+施設見学+利用者との交流
9月12日 (金)	◇「Cancer Lifelines」視察 レクチャーQ&A+施設見学 ◇「Seattle Children's」視察 レクチャーQ&A+施設見学
9月13日 (土)	◇シアトル市内自主研修
9月14日 (日)	◇帰国のためタコマ空港へ
9月15日 (月)	成田国際空港到着

また、海外研修事前準備として、海外研修説明会時に視察先の情報提供を行い、学生は視察先の情報をもとに施設利用者との交流計画をふまえ、各自で手作りのお土産を作成するなどして研修準備に励んだ。また、学生個々の研修課題や研修目標の明確化を行った。

視察した施設の概要は以下のとおりである。

1. ワシントン大学施設見学

今年は、ワシントン大学で芸術を専攻している学生の案内によって行われた。Central Plazaの周囲にある「図書館」、「Drumheller Fountain」というみごとな噴水のある池、春になるとソメイヨシノの桜の花が満開となり学生の憩いの場ともなっている広場「The Quad」など、キャンパス内の代表的なエリアや施設のガイドを受けた。キャンパス内の多くの施設は内部への立ち入りが自由なため、学生は自由時間になると、University Book StoreやHUB(Student Union Building)内やドミトリー内の売店も含めて、キャンパス内を散策した。



[写真1] ワシントン大学のキャンパスツアー

2. UW Medical Center, Health Science Center 自主見学

Medical CenterとHealth Science Centerで準備されている「Self-Guided Tour」というガイドマップを片手に、学生は2つのグループに分かれて自主見学を行った。

看護学部はHealth Science Centerの中にあり、他に、医学部、歯学部、公衆衛生学部、社会学部なども同じセンター内に所属している。

Medical Center(大学病院)は心臓、移植、外科、がん、放射線科、専門クリニックなどの分野によってエリアが分かれていた。癒しの効果を期待し

て作られたガーデニングやカフェテラス、明るい採光を施すための工夫などされていた。

3. ワシントン大学 看護学部

Associate Professor Yoriko Kozuki氏による講義

Yoriko Kozuki氏からは、アメリカの保険医療制度および看護教育制度に関する講義を受けた。Yoriko Kozuki氏はワシントン大学で教鞭をとるだけでなく、精神看護領域のナース・プラクティショナーとしてProvidence Everett Healthcare Clinicにおいても活躍されている。講義には、ご自身のナース・プロテクションナーとしての事例を提示されながら、大学と地域社会とのコラボレーションの必要性について、アメリカの保険制度と看護職の役割との関係、また、医師と看護師との役割や仕事内容の特徴などの非常に興味深い講義であった。

4. ワシントン大学生とのパーティー

ワシントン大学からは、男性1名、女性2名、計3名が出席してくれた。自己紹介のあと軽食を取りながら、会話やゲームを楽しんだ。パーティーの翌日、再度キャンパス内で合流する約束を交わすなどして、学生は積極的に交流を深めていた。

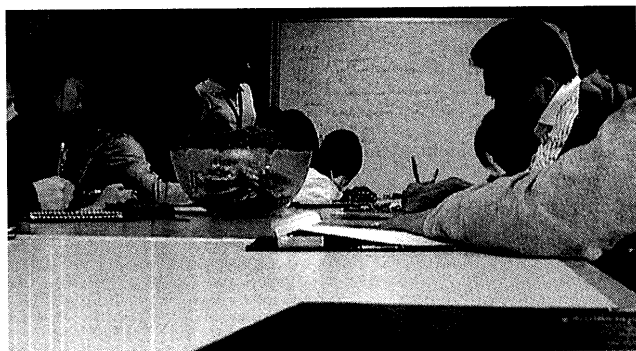


[写真2] UWの学生とフェアウェルパーティー

5. Seattle Keiro Nursing Home

1970年代、高齢になった日系一世が、日本の食生活や生活習慣などを懐かしく思い、みんなで寄付を募って設立された高齢者入居施設である。したがって、日本文化を意識したアクティビティや食事に考慮することで、高齢者が快適な余生が送れるような場所を提供している。設立当初は、主に日系アメリカ人の高齢者とその家族のニーズに

応えるためのサービスを提供していたが、現在の利用者は、日系アメリカ高齢者だけではなく、その約5割が中国系、韓国系、ベトナム系、アフリカ系アメリカ人で構成されている。活動は、多くの日系アメリカ人をはじめとする地域に在住のボランティアや寄付によっても支援されている。今回視察した施設は、看護が必要な高齢者の入居施設であるが、他に、軽度の介護を必要とする高齢者が入居する「Mikkei Manor」という施設、入居者だけではなく外来者も利用できる「Kokoro Kai」というデイサービス施設、高齢者の生涯学習の場として「Nikkei Horizons」がある。研修では、上武大学の学生もボランティアとして訪れていた日系人の夫妻とともに、認知症高齢者の方々と歌や折り紙などで交流を図った。



[写真3] 高齢者施設の説明を受ける



[写真4] お土産の「だるま」を紹介

6. Anderson House

Anderson家族が経営している高齢者施設である。「Anderson House」は認知症以外の高齢者であるなら、どのような生活レベルの高齢者でも入居できるContinuing Care Retirement Community(CCRC)という形態をとっている。看護やリハビリテーションに力を入れており、66%

の高齢者が軽度の介護だけで生活できるレベルになるということであった。こちらの高齢者施設も、ボランティアや寄付によってさまざまな活動が成立している。学生は、軽度の介護を必要とする高齢者とともに、持参のお手玉や折り紙を披露するなどして高齢者との交流を楽しんだ。さらに、施設見学の際には、身体拘束についての質問をするなど学生自身の考えを含めた活発な質疑応答を行っていた。



[写真5] 高齢者との交流



[写真6] 高齢者との交流

7. Cancer Lifelines

非営利団体でがん患者や患者を支える家族や友人の心理的サポートや情報交換の場やエクササイズプログラムを提供している施設である。看護師やco-workerなどにもサービスを提供している。24時間体制で電話相談を受け付け、とにかく、当事者の話を聞くことに徹底している。また、芸術に触れることで言葉にはならないものを表現できるようなヒーリングアートプログラムや、ウェルネスのためのヨガや瞑想のプログラム、さらにリンパ性浮腫のためのプログラムなど心身各種のプログラムを準備しサポートを行っている。



[写真7] Cancer Lifelinesにて



[写真8] Seattle Children'sのかわいいエレベータ

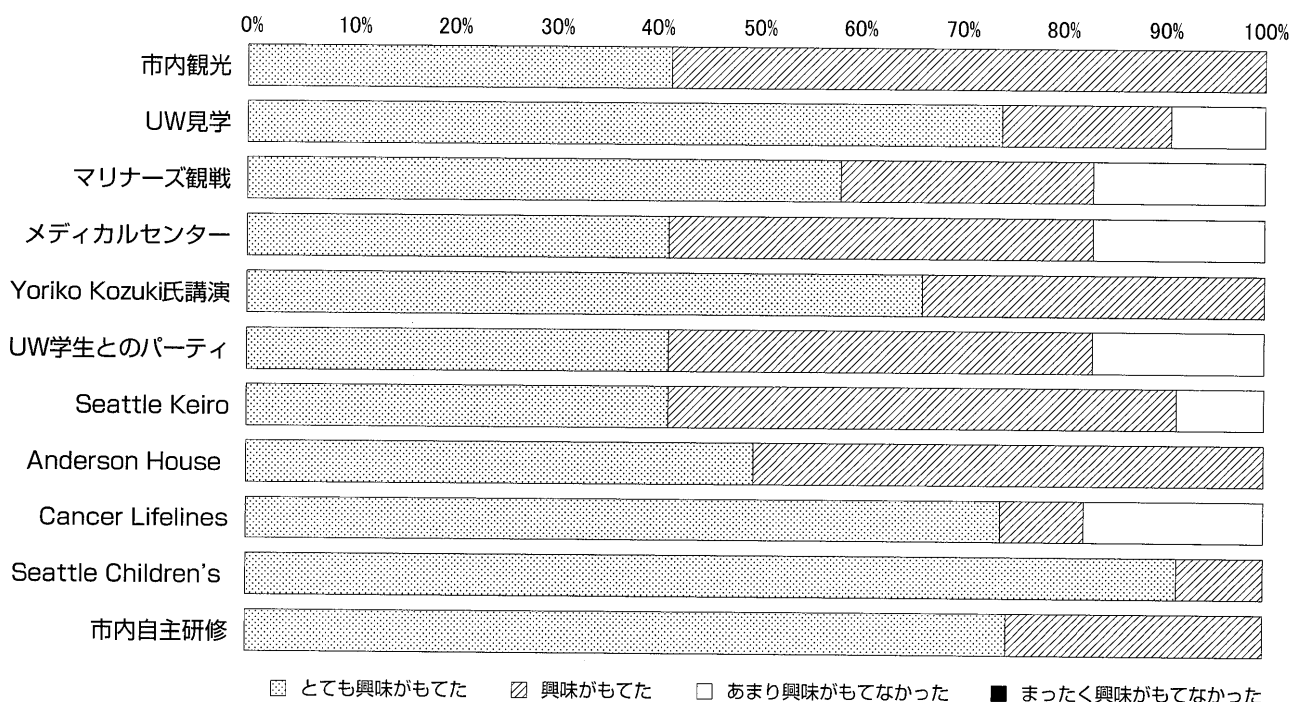
8. Seattle Children's

昨年度も視察した子供病院の「Children's Hospital & Regional Medical Center」が2008年9月より名称変更となり「Seattle Children's」となった。病気のため入院や治療を余儀なくされている子供たちの心理的なケアを看護職以外のコメディカルスタッフがどのように協働して子供たちを支えているかの説明を受けた。対象が子供であっても、子供たちなりに納得して治療や処置が受け入れられるようきちんと説明を行っている。塗り絵や絵本や人形などを用いて子供たちが治療や処置の真似を行いながら、これから自分自身に起こってくる出来事を理解していくための方法やツールなどの紹介があった。

Ⅲ. 研修に対する学生の評価

帰国後、個々の研修課題や研修目標をまとめた時点で無記名でのアンケートを実施した。今回の海外研修に対する満足度は、「とても満足している」が9名「満足している」が2名で無記入が1名であり、12人中11名が満足していた。研修項目別の興味調査においては、「市内観光」「Yoriko Kozuki氏講演」「Anderson House」「Seattle Children's」「市内自主研修」の研修項目においては、全員が興味もてたと回答していた。[図1]

[図1] 学生アンケートの結果



ワシントン大学見学やメディカルセンター見学においてあまり興味をもてなかった理由として、「内部の見学をもう少ししたかった」「看護学部の内部があまりよくわからなかった」「セルフガイドツアーだけでは良くわからなかった」という意見が上げられていた。ワシントン大学生とのパーティーであまり興味をもてなかった理由として、「うまく話せなかったから」という理由があげられていたが、英語はうまく話せなかったが、友達になれたという理由で「とても興味をもてた」という学生もいた。

IV. おわりに

限られた時間の中での視察や交流会ではあったが、学生は時間を有効に活用し自主的に行動し、講演や施設内での説明にも熱心に耳を傾け、自分の意見を含めて積極的に質問を行っていた。市内観光で出会った人々、UWの学生との語らい、高齢者施設でボランティアの一員として折り紙を折ったり歌を歌ったりしながら入居者の方々と過ごした時間など、さまざまな場面でアメリカの環境や文化や人々との交流を体験したのではないかと思われる。また、今回アメリカの保健・医療の現状に触れたことで、改めて日本の保健・医療・福祉への関心を深めていく動機付けになりうる体験が得られたのではないかと思われる。

Oversea-Training Report in 2008
— The 2nd Nursing Student Overseas Training Program —

International Exchange Committee, Faculty of Nursing

Yoshiko ARAI¹⁾

Takemi WATANABE²⁾

Takeshi KATSUKI¹⁾

Abstract

The Second Student Overseas Training Session was held in Seattle, Washington, in the United States, September 8 – 15, 2008. There were 14 participants in all, including students and faculty. Visits were made to a total of four facilities: two elderly care facilities, one pediatric hospital, and one non-profit facility providing support for cancer patients and their families. The degree of satisfaction with this overseas training can be judged from “satisfied” responses given by 11 of 12 students participants.

1) Faculty of Nursing 2) Formerly Faculty of Nursing